

はじめて書かれたイギリス論——その二 近藤守重『伊祇利須紀畧』註釈と書誌——

海 老 久 人

註釈（各項末「↓文書名」は、守重の一次資料名の明示と内容の転載を目的とし、別稿を用意している）

〔註1〕典拠「御朱印」とは元和二年八月二十日付で平戸イギリス商館長リチャード・コックス (Richard Cocks) に渡された更新朱印状のこと。コックスは“September 25, 1616”（元和二年八月二十五日）の日記にこの更新朱印状を受け取ったことを記している。（Thompson [1883], pp. 180-1）守重の一次資料は『御當家令條』で、長崎在勤時に『憲教類典』編纂を継続するのにあわせて、外題『憲教類典 三四』、内題「憲教類典 二ノ廿二 長崎^{異國}」に朱印状全文を写している。さらに、同長崎在勤時にまとめた『安南紀略藁』（巻之一、六頁）と『亜媽港紀略藁』（上、三頁）でも『御當家令條』を援用している。

〔元和二年八月廿日マタ五ヶ條ノ御朱印ナシ下サル〕セウ、および「寛文十三年五月〈中略〉長崎へ一艘来津ス〈中略〉御朱印持渡ルベキトコロ」（八〇）の各「御朱印」とおなじ。元和朱印状は、それに先立つ慶長十八年八月二十八日付でジョン・セーリス (John Saris) に渡された七ヶ條朱印状とは別で、交易条件を限定する五ヶ條の更新朱印状である。

はじめて書かれたイギリス論

なお、慶長朱印状について、守重は書物奉行就任（文化五年）後に

『外蕃通書』（文政二年）で「東照宮賜伊祇利須御朱印」と題して収録している。原本は正徳三年に京都、南禅寺金地院から提出された『異國日記』七冊本で、紅葉山文庫に所蔵されていた。「記畧提要」執筆時、守重は参考にできなかった。

↓「憲教類典」、『御當家令條』、「異國日記」(3)、『外蕃通書』(3)

〔註2〕典拠「政事録」とは『駿府政事録』のこと。

↓「駿府政事録」(1)

〔註3〕典拠「荷蘭人語」とは歴代オランダ商館長（加比丹）が長崎奉行所に提出した情報、いわゆる風説書のこと。また、守重が長崎在勤時に「阿蘭陀風説書」を直接検分しえた背景について、幸田成友「寛政九巳年の和蘭風説書」『史學』16巻3号（1937、11月）、pp. 67（395）～75（403）を参照。すでに『憲教類典』「二ノ廿二 長崎^{異國}」「天明元辛丑年七月」の項で「阿蘭陀人申上候風説書譯文」という頭書を確認できる。さらに、『亜媽港紀略藁』（上、十一頁）に「○風説書 寛文七末年咬啗吧出シ一番船ニ申越候覺」全文が記載されている。

↓『阿蘭陀風説書』(1)

〔註4〕典拠「采覧異言」とは新井白石『采覧異言』のこと。なお、「意呼」は「意大里亜」語、「波呼」とは「波爾杜瓦爾」語、「和呼」とは「和蘭」語の意味。

↓『采覧異言』

〔註5〕典拠「職方外紀」とはジュリオ・アレニ (Giulio Aleni、艾儒略)『職方外紀』のこと。ただし、「職方外紀」に「漢父刺亜」という表記は見えない。「漢父刺亜 諸厄利亜」の並記は『采覧異言』に見える。

↓『職方外紀』、『采覧異言』

〔註6〕典拠「通信事畧」とは新井白石『外國通信事畧』のこと。なお、『外國通信事畧』は写本間の異同が多く、濁音・清音表記が一樣でない。なお、「インカラテイラ」、「ヲトフリタンヤ」は、白石が正徳二年にその存在を確認した金地院本『異國日記』に記載の「インカラテイラ」、「おふぶりたんや國」に由来する。

↓『外國通信事畧』、『異國日記』(2)

〔註7〕典拠「通商考」とは西川如見(求林齋)輯『華夷通商考』か同『増補華夷通商考』のいずれかだが、ここでは『増補華夷通商考』を指す。

↓『増補華夷通商考』

〔註8〕典拠「其国書通商考」とは西川忠英如見子誌『華夷通商考』のこと。書名の誤記、誤写の発生経緯は不明。

↓『華夷通商考』

〔註9〕典拠「萬國記」とは「竹菴主人」が明和三年に写した『萬國記』

を指す。守重の「インケリヤ」と『萬國記』の「インキリヤ」との異同について、その原因は不明。なお、記事内容は『増補華夷通商考』と同じ。

↓『萬國記』、『増補華夷通商考』

〔註10〕典拠「泰西図説」とは朽木昌綱が著した『泰西輿地圖説』のこと。寛政元年本では「エンゲランド」または「エンゲ、ランド」となっている。濁音・清音表記異同の原因は不明。

↓『泰西輿地圖説』(1)

〔註11〕守重は典拠を『長崎雜記』としているが、本稿では『長崎旧記』として扱う。詳細は「書誌」を参照。

↓『長崎旧記』(1)

〔註12〕典拠「天地毯用法」とは本木仁太夫(良永)が寛政四年に翻訳した『新制天地二球用法記』のこと。なお、これに先行する『天地二球用法』はイギリスの国号表記を「漢父刺亜」としている。

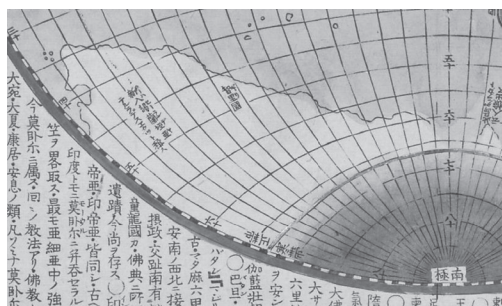
『新制天地二球用法記』の綴訳語について、「和解例言」で「一和蘭言語ノ音聲(中略)彼邦ノ語音ニ叶ヒ難シ是ニ因テ唐通事石崎次郎左衛門ニ唐音ヲ学ビ和蘭文字ノ語音ニ漢字ヲ合セ記スルナリ」とし、唐通事石崎次郎左衛門の助言による漢字当て字であることがわかる。

↓『新制天地二球用法記』(1)

〔註13〕典拠「松前人語」とは松前藩で使われていたロシア語和訳のことである。守重の一次資料を特定できないが、状況証拠から寛政九年七月と閏七月の両月、松前若狭守から戸田氏教への届書二通が参考

資料となる。なお、おなじ届書の写しは『通航一覽』巻二百五十四(三百六十八頁―三百六十九頁)にも見える。

当該箇所は寛政九年「伊祇利須紀畧」初稿成立段階ではなく、守重が翌寛政十年三月「松前蝦夷御用取扱」着任して以降に加えられた。背景にはイギリス人ウィリアム・ブロートン(／ブラッソ)(William R. Broughton) 船長の「プロヴィデンス (HMS Providence)」号が寛政八年八月に虻田、翌寛政九年七月に絵鞆へ入津した事件がある。



鳴蘭新譯地球全圖より

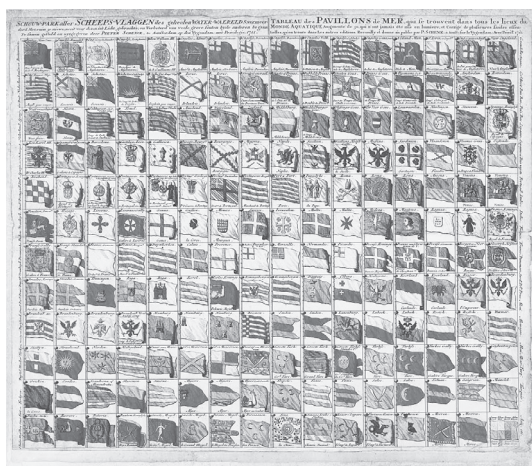
当該表記はイギリス船航跡と一致し、「ノウハヤコランテヤ」は松前家届書の「イワヤゴウランデヤ」を指すと思われる。ブロートン日記から判断すると、「New Holland」(Broughton [1804], p. 1 [現オーストラリア])が「New Zealand」(ibid., p. 5)を指す。当時の日本では南太平洋の地理は未知で、寛政八年橋本宗吉作・長久保赤水玄珠閔『鳴蘭新譯地球全圖』の漢名「新入謁蘭垚亜」にフリガナ「ねーハセーランデヤ」と、享和三年山村才助『訂正増譯采覽異言』巻之十二の「ニイウウェ、セエランド」という表記が見えるのみである。

↓『伊祇利須情迹叙略』

はじめて書かれたイギリス論

「註14」^{名義}「フリタニイ」は、守重が長崎在勤中に監修した『異国幟旗考』の「第壹號／第一 フリタリアニイ國旗」という表記に係り、フランス語「Bretagne」の訳語と推定される。Schenck [1711]でも、赤地に連合王国を表す Red Ensign のイギリス商船旗は先頭に配置されている。後に、『外蕃通書』で「プリタンニア」又「フリタニイ」ハ、其國ノ古名ニシテ、今猶通稱セルモノナリ」(第二十七冊、百八十七頁)と説明している。

↓『異国幟旗考』



Schenck [1711] 全体図(縦49.5cmx横59.5cm) (原図彩色)



左上先頭図(拡大)

「註15」

「長崎ヲ距ルコト西海凡七千六十里余(以下略)」は守重独自の距離計算による。大概玄沢の『捕影問答』と『伊祇利須疑問』、そして『通

航一覽」卷之二百五十二「諸厄利亜國部一」(三百三十九頁)に引き継がれる。

↑ 按文で言及される典拠のうち、『外国船路積』は作者不詳で寛永十四年に写された『洋記異國渡海船路積』のことで、この写本は現在京都大学文学研究科図書館内田文庫所蔵になり、守重自身が直接手にとつて参考にした可能性がある。その根拠は、『亜瑪港紀略藁』中「一書云、此記ハ日本長崎ヨリ異國へ渡海之湊口マテ船路積ト題シテ奥ニ寛永十四年八月朔日ト有之毎數五六枚ハカリモアル雜記ナリ」(『全集』第一、三十三頁)で、「一書」、「雜記」こそこの『洋記異國渡海船路積』である。

↓ 『洋記異國渡海船路積』

↑ 「通商考」は『華夷通商考』のこと。

↓ 『華夷通商考』

↑ 「和蘭航海畧記」は『和蘭航海畧記』のこと。ただし、松村元綱は「四千七百五十里」という具体的な距離数を示していない。

↓ 『和蘭航海略記』

〔註16〕

↑ 「其北海ノ針路ハ得テ詳ニスヘカラズトイヘ臣」は、イギリスを出帆して北回り、つまり、北極海航路は詳しく分からないという。この情報の出処は『泰西輿地圖説』で、延宝四年三月、イギリス人冒険家ジョン・ウッド (John Wood) が「スピードウェル (the Speedwell)」号に乘組み、アジアへの新航路発見に向け出帆するも、氷にはばまれた事実が記載されている。この冒険は「伊祇利須紀畧」(十五ウ)でも言

及される。(〔註72〕参照)

↓ 『泰西輿地圖説』(3)

↑ 「諸厄利亜本国ヨリ西南ニ出テ(中略)凡一万八百里ホト」とは、イギリスから大西洋を南下し、ブラジルから現マゼラン海峡を回りメキシコから日本へ至る航路を想定している。「伯刺西兒ハラスリ」は「ブラジル」のこと。「墨瓦臘尼メカラニ」という表記は、当時の文献をみるかぎり、守重のみである。「墨瓦臘尼加」という漢名表記で「メカラニカ」とフリガナを添えられることが多い。「墨古是哥」について、「メキシコ」と呼ばせたものか、それとも「古墨是哥」の誤写なのか不明。

↑ 「北亜墨利加ノ地(中略)凡四千九百五十里ホド」とは、ニューファウンドランド島から陸路「パナマ地峡(現パナマ運河)」を越えて太平洋を北上する航路を想定している。「的尔刺諾髮」は「テルラノヲハ」とフリガナを添えられ、現在の「ニューファウンドランド島」にあたる。「新伊斯巴」ニバ「尼亞」は現在の中央アメリカにあたる。

↑ 「天地毯用法ノ圖ハ精絶ノヨシナレド見ルコトヲ不得又蜜書中ニクハシクアルヘケレド不知レバ今鄙陋ノ臆見ヲ附シテ後考ヲマツ」、つまり、「天地毯用法の図版や蜜書、つまり、オランダ語版には精密に描かれているようだが、直接見ることができなかったのだ、ここでは浅薄な私見を披露するにとどめ、後世の評価を俟たい」というのだ。この「天地毯用法」とは、上記「註12」の『新制天地二球用法記』のこと。

出典表記だけでは、同じ本木の『天地二球用法』(安永三年)と紛

らわしいが、「精絶の圖」という点では、プロースのオランダ語重訳版の全十四図版 (Pls) 三十六図 (figs) を写す『新制天地二球用法記』を指す。筆者が検証した限りでは、『新制天地二球用法記』には三種類の写本があり、完本は本本自筆本のみで、早稲田所蔵本は一部の図が欠落し、国立公文書館所蔵本は、その外題にもかかわらず、全体の一部のみで、図版すべてが欠落している。また、三種類の写本調査結果からすれば、守重が検分できなかった「天地毬用法」とは本本自筆本を指す。また、「蛮書」とは、アダムズの英語原本ではなく、プロースのオランダ語重訳版を指す。詳細は書誌を参照。

〔註17〕典拠「西洋浅譜」とは朽木昌綱『西洋錢譜』のこと。

↓『西洋錢譜』(1)

〔註18〕「職方外紀ニ〈以下略〉」とは『職方外紀』のこと。

↓『職方外紀』

〔註19〕「今日本ノ里数ヲ以テ考ルニ〈中略〉開平ニシテ二百七十里四方ナリ」は『西洋錢譜』の数値を基にした面積である。東西二十二度半／十四度の差八度半、南北五十六度半／五十度半の差六度を基に日本の里数換算法一度三十里を掛けた数値。なお、緯度・経度一度につき「三十里」とする日本の里数計算法は当時広く受容されていた。

↓『西洋錢譜』(1)

〔註20〕イングランド、スコットランド、アイルランド三カ国の面積について、その典拠「泰西畧説」とは『泰西輿地圖説』のこと。

↓『泰西輿地圖説』(2)

はじめて書かれたイギリス論

〔註21〕

†「三州合テ積三万五千二百坪〈中略〉此国我日本ノ大サト云ヘルモ可ナラン欤」とは、『西洋錢譜』を根拠に示された数値二百七十里と『泰西輿地圖説』を根拠に示された数値百八十七里とでは三十里の差が出るが、もし百八十七里だとすれば、イギリス国土の大きさは日本と同じかもしれないというのだ。

†「日本ハ拂郎察ニテ測リシヲ〈中略〉二万九千五百坪ナルナリ」、および、上部欄外余白書込みは、享和三年の平野昌傳撰『輿地各國積解』に依拠したものと思われる。当該箇所は寛政九年『伊祇利須紀畧』初稿成立段階ではなく、後年、享和三年以降に書加えられた。守重自身の手になるかは不明。

この記述は『輿地各國積解』冒頭とほぼ重なる。また、日本の面積「七千三百七十五坪」、「二万九千五百坪」は『輿地各國積解』に添えられた各国面積一覧表と合致している。欄外書込みも、表記の異同があるものの、一覧表に対応する。

↓『輿地各國積解』

〔註22〕

†「此地フランス国ノ〈中略〉大島ニシテ」は『西洋錢譜』の記述と一致する。

↓『西洋錢譜』(1)

†「南ハ廣ク北ハ尖リテ三角ノ形ヲナシ四方ミナ海岸ナリ〈中略〉皆隆動ニ朝貢ス」は「泰西圖説卷之五」を典拠としている。

↓『泰西輿地圖説』(2)

〔註23〕典拠「通商考」とは『華夷通商考』のこと。なお、同様の表現は『増補華夷通商考』にも見える。

↓『華夷通商考』、『増補華夷通商考』

〔註24〕典拠「長崎夜話」とは西川如見『長崎夜話草』のこと。

↓『長崎夜話草』

〔註25〕典拠「采覧異言」とは『采覧異言』のこと。

↓『采覧異言』

〔註26〕典拠「泰西圖説」とは『泰西輿地圖説』のこと。

↓『泰西輿地圖説』(2)

〔註27〕典拠「西洋錢譜」とは『西洋錢譜』のこと。

↓『西洋錢譜』(1)

〔註28〕典拠「海外聞見録」とは、清の陳倫炯が雍正八(享保十五)年にまとめ、乾隆九年(延享元年)に刊行した『海國聞見録』のこと。守重は『好書故事』で「其他西人ノ事ニ及ブ群書ハ…海國聞見録…等ニモ見ヘ枚舉に遑アラズ」としている。(二百十八頁)

↓『海國聞見録』

〔註29〕典拠「異言」とは『采覧異言』のこと。

↓『采覧異言』

〔註30〕典拠「長崎雜話」とは『長崎雜話』の「寛文十三庚丑年五月廿五日」付記事を指す。

背景は一六六二年五月二十日に、イギリス国王チャールズ二世

(Charles II) がカトリック教徒ポルトガル国王ホアン四世の娘キャサリン・オヴ・ブラガンザ (Catherine of Braganza) と結婚したものである。

↓『長崎雜話』(4)

〔註31〕「守重日(以下略)」は、前記〔註30〕に関連した守重の按文である。内容は延宝元年五月二十五日に、サイモン(／セイモン)・デルボー(Simon Delboe)を船長とするイギリス船「リターン」(The Return)号が長崎に入津し(Delboe[1673], p. 350)、元和七年以来中断していた通商交易の復帰を求めるも、オランダ側からチャールズ二世とキャサリンとの結婚を根拠に、イギリスがカトリック教国ゆえ日本の貿易相手国にふさわしくないと訴えたことを指す。なお、元号について、守重は「来聘」の項で同じ出来事を「寛文十三年五月」として、延宝元年は十一月に改元されたとわざわざ割注を付している。

↓「長崎実録大成」

〔註32〕典拠「蘭人ハアスノ語二」とは、延宝六年のオランダ商館長デレキ・デ・ハアス(Dirck Haas)による情報。内容は、一六七七年にオランダのオレンジ公ウィリアム(William of Orange)がイングラント国王チャールズ二世の姪メアリー二世(Mary II)と結婚したことを指す。(〔註38〕参照)

↓『阿蘭陀風説書』(4)

〔註33〕典拠「ハンフイムノ語二」とは、元禄三年のオランダ商館長ヤンデレ・ハン・フイトム(Hendrik van Buytenhem)による情報。

背景はカトリック教徒を公職から排除するために一六七三年に「審査法」(The Test Act)が制定されたにもかかわらず、カトリック教に改宗した国王ジェイムズ二世がイングランドをカトリック教国にしようとしていた事情がある。これに対抗して、オレンジ公ウィリアムがメアリ二世とともにイングランドに入り、「名誉革命」(一六八八年)が起こった。宗教対立をめぐり、イングランドとオランダはヨーロッパ大陸を巻き込んで戦争・和睦を繰り返していた時代だった。

注目すべきは、守重がイギリスに対して率直な言葉で、「自ら考へサルニ似タリ」とイギリスに主体性がないと断じていることである。

↓『阿蘭陀風説書』(8)

〔註34〕典拠「スセイサル語」とは、延宝三年、オランダ商館長マルティヌス・セイザル(Martinus Caeszar)による情報。

↓『阿蘭陀風説書』(3)

〔註35〕典拠「テンランス語」とは、貞享三年、オランダ商館長コンスタンテン・ランス(Constantin Raust de Jonge)による情報。

この情報は、一六八五年のチャールズ二世の死去にともない、王位を継承したジェイムズ二世(James II)と彼の後妻メアリ・オヴ・モデナ(Mary of Modena)に触れたものである。「守護女房」が「メアリー・ハイド」とされているが、事実はイタリア、モデナ公国出身である。ジェイムズは一六六八、九年ごろにカトリック教に改宗したようで、先妻アン・ハイド(Anne Hyde)が亡くなった後、一六七三年に熱心なカトリック教徒メアリと再婚することになった。

はじめて書かれたイギリス論

↓『阿蘭陀風説書』(6)

〔註36〕典拠「スヘイルス語」とは、元禄二、三年、オランダ商館長バルタアサル・スヘイルス(Balthasar Sweers)による情報。(〔註40〕参照)

背景は一六八五年のイングランド国王チャールズ二世崩御と弟ジェイムズ二世の即位、つづく「名誉革命」を経て、一六八九年にオレンジ公ウィリアムがウィリアム三世としてイングランド国王に即位した経緯に触れたものである。

なお、「前註」とはジェイムズ二世即位の一六八五年を指す。

〔詳見国主部〕とは、「伊祇利須記畧提要」本文中の「国主」部(六オ／六ウ)に「元禄二年」のウィリアム三世即位について書かれるはずだった。

↓『阿蘭陀風説書』(7)、『阿蘭陀風説書』(8)

〔註37〕典拠「メンセンノ語」とは、宝永四年のオランダ商館長ハルマアノス・メンセン(Hermanus Mensingh)による情報。

なお、割注「宝永四年我薩 此ハ来リシハテレンモ」の典拠は不明だが、

〔此間来リシコト、開サレド宝永五年通商ノ人ヲ 送テ薩州ニ多岐路ニハ寄リテハ薩州ノ語ニ〕(ハオ)と混乱している可能性がある。つまり、

宝永五年にイタリア人宣教師シドッチが屋久島へやって来たことを指す。(〔註57〕参照)

↓『阿蘭陀風説書』(9)

〔註38〕典拠「デハアス陀語」とは、上記〔註32〕と同じハアスによる情報。

↓『阿蘭陀風説書』(4)

〔註39〕典拠「ハンフイトノム語」とは、貞享元年のオランダ商館長ヘンデレキ・ハン・フイトノム(Hendrick van Buytenhem)による情報。内容は

一六八三年にチャールズ二世の姪でメアリ二世の妹アン (Anne) がデンマーク王子ジョージ (George of Denmark) と結婚した事実を指している。

↓『阿蘭陀風説書』(5)

〔註40〕典拠「スヘイルス語」とは、上記「〔註36〕と同じスヘイルスによる情報を指す。ただし、「此国ノ守護ホルトカル国ノ聶ナリ」は、チャールズ二世とポルトガル国王ホアン四世の娘キャサリン・オヴ・ブラガンザとの結婚を指している。

↓『阿蘭陀風説書』(7)

〔註41〕「同」〈以下略〉とは、前項と同じスヘイルスの情報。イギリス国王ジェームズ二世の娘メアリ二世がオランダのオレンジ公ウィリアムと一六七七年に結婚した事実を指している。

↓『阿蘭陀風説書』(7)

〔註42〕断片の情報の羅列だが、イギリスと通商関係、交戦状態にある国々について書かれる予定だった。

〔註43〕守重は慶長五年を「西洋千五百九十九年」としているが、西洋暦(グレゴリオ暦)では「千六百年」。厳密には、「西洋千五百九十九年」は慶長四年十一月十四日まで。ついで「泉州堺ノ浦へ蜚舶一艘来津」とあるが、当時の公文書には豊後臼杵漂着の事実は記されていない。また、「八九年ノ間逗留シ」(以下略)「七〇」という文言をたどると、『長崎雑話』を典拠としたと考えられる。

↓『長崎雑話』(1)

〔註44〕典拠「異言」とは『采覧異言』のこと。『長崎雑話』では「やんよう須」「阿んし」はおなじ一艘の船に乗ってきたことを確認していたが、守重は白石の説「各駕一大船。共泉州界浦。」を紹介し、別々の船で堺に来航したとしている。なお、『通航一覽』は二艘説を正して、「慶長五庚子年、漢^{イギリス}父刺亜國人と和蘭國人、各一大船に按ずるに、諸記諸厄利亜、阿蘭陀人、同船のよしを記す、今格船のよし記すは誤りなるへし乗て、初て泉州堺浦に着岸す」と確認している。(巻之二百五十二、三百四十頁)

↓『采覧異言』、『長崎雑話』(1)

〔註45〕「後九年ヲ經テ十三年」とは慶長五年から丸九年を経た慶長十三年にオランダ船平戸入津の事実を指す。守重の一次資料は『長崎雑話』である。

↓『長崎雑話』(2)

〔註46〕「此時御朱印成シ下サレタリ」(以下略)とは、慶長十四年七月二十五日付けでオランダ側に渡された朱印状のことである。按文「此御朱印ノコト未詳」(同十四年七月廿五日)〈以下略〉からは、一次資料は不明だが、守重にはかなり正確な情報が手元にあったようだ。なお、守重は「西洋ノ千六百八年」としているが、正確には「千六百九年」である。

↓『長崎雑話』(2)、『異國日記』(1)

〔註47〕「同十七年ヨリエケレス平戸へ来リ交易ス」は事実誤認だが、守重の頃、慶長十七年をもってイギリスが平戸へ来て交易を開始した年とされていた。慶長十七年八月十二日、オランダ船平戸入津が事実である。この混乱は長崎地誌にも見られ、『外蕃通書』でも引継がれる。

↓『外蕃通書』(2)、『長崎旧記』(2)、『長崎古今集覽』、『長崎雜誌』(3)

[註48]「同十八年〈以下略〉」の記事にはいくつか事実誤認が含まれている。

↑「同十八年秋国王始テ書ヲ捧ス御返書ヲナサル」という文言について、典拠の明示はないが、『外國通信事畧』と思われる。さらに、その原典は『異國日記』である。(註6)参照)

↓『外國通信事畧』、『異國日記』(2)

↑「八月二日其使江戸着」は「駿河 (Sorongo) 着」となるべき。(「The

6th [September] Satow [1900], p. 129)

↑「三日朝見セラレ猩々皮十間弩一挺鉄炮二挺遠目鏡一ヲ獻ス六日夕二ノ丸ニ於テ其人花火ヲ立ル御覽アリ」は『駿府政事録』の記事と合致する。ただ、花火見物については『駿府政事録』では唐人参府との関連で記載されたもので、守重の「其人」は「唐人」の誤写か。

ところで、ジョン・セーリス一行の家康謁見は「八月四日」(「The

8th [September] Satow [1900], pp. 129-131) だが、守重は『外蕃通書』

でも「八月三日」か「八月四日」か決めかねている。『異國日記』は「八

月四日」を明記し、『駿府政事録』と『駿府記』は「伊毛連須 (ノイ

ゲレス) 今日候殿中」という記事が見えるが「八月三日」の項に紛れ

込み、「八月四日」の日付が脱落している。『通航一覽』でも「同十八

癸酉年八月三日、異國日記には四日とす、職
府政事録に止戈談義による諸厄利亜國主よりはしめて書簡方

物を捧げ、通商熟和に及はん事を願ふ、時に使節駿府において東照宮

に拝謁す〈以下略〉」と記す。(巻二百五十二、三百四十四頁)

↓『駿府政事録』(1)、『駿府記』、『異國日記』(2)、『外蕃通書』(1)

[註49]「同十九年マタ使ヲシテ来ラシム」とは、慶長十八年につづき翌十九年にもイギリス人使者が駿河城を訪れたことを指している。守重

は『采覧異言』の「明年復遣使來」を参考にしたようだ。他に、『駿府政事録』

「慶長十九年甲寅 八月大十三日」の記事も参考にできた。ただし、

当該文書は「南蠻人黒舟船頭」がイギリス人であると特定しているわ

けではない。『通航一覽』は「慶長十九甲寅年八月月^マ十三日、黒

船之甲毘丹^{自注、イギリスなり}、於駿城賀禮、以上、異國日記」と特定している。

(巻之二百五十二、三百四十六頁) 近年の調査では「南蠻人黒舟」はマ

カオからの定期船であったとしている。(村上直次郎譯註『異國往復

書翰集・増訂異國日記抄』駿南社、昭和四年、211頁)

↓『采覧異言』、『駿府政事録』(2)

[註50]「元和二年〈以下略〉」とは、元和二年八月二十日付で平戸イギ

リス商館長コックスに渡された更新朱印状のこと。(註1)参照)守

重は「其文下載ス」としているが、実際に記載されることはなかった。なお、

守重は当該日付について「西洋千六百十六年」と正確に特定している。

↓『憲教類典』、『御當家令條』

[註51]「其後年々渡来セシニ〈以下略〉」とは、元和七年をもってイギ

リス側から通商関係を絶ったことを指す。

↓『長崎旧記』(2)、『長崎雜誌』(3)

[註52]「然モナオ其種子〈以下略〉」とは、島原の乱を収めた松平伊豆

守信綱が平戸へ立ち寄り、居留オランダ人の動静を検分、併せて、寛

永十六年に平戸と長崎に在留するオランダ人・イギリス人の血を引く者を咬嚼吧へ国外退去させる措置がとられた。

↓『長崎旧記』(1)

〔註53〕「此ヨリ三十五年ヲ経テ(以下略)」とは、鳥原の乱から九三十五年、寛文十三年五月二十五日に「リターン」号が長崎に入津した事件を記したものである。(〔註31〕参照)

↑^{〔十一月延宝〕}ト改元「は、典拠『長崎実録大成』の日付「延宝元年五月」について、「五月」はまだ寛文十三年で、十一月に「延宝」に改元されたことを確認している。

↓「長崎実録大成」、「長崎雑話」(4)、『外蕃通書』(4)

↑^{〔加比丹船七イモアル物人数八十六人船長十九間余〕}ト改元「鉄炮備有火全無」は、「リターン」号船長デルボー率いる乗組員数や武器の詳細を記した「長崎実録大成」を典拠にしている。

〔小玉〕の囲い字は「長崎実録大成」から補った。

↓「長崎実録大成」

↑按文「御朱印持渡ルベキトコロニ(中略)書付七カ条ヲ出シタリ^{載下二}」のうち、「御朱印持渡ルベキトコロニ」とは、本来なら、デルボーは元和朱印状を長崎奉行へ提示すべところ、(〔註1〕、「〔註50〕参照)別の文書、つまり、「平ラ仮名文字ノ書付七カ条ヲ出シタリ」を指す。(図1)「平ラ仮名文字ノ書付」とは、慶長十八年にジョン・セーリスが幕府から御朱印を獲得するための請願書素案を英文で十四ヶ条にまとめ、さらにそれから七ヶ条に縮約された英文から日本語に訳された文書だった。つまり、イギリス側で日本語訳請願書と朱印状とが混同さ

れていた。(図2) 守重は、その請願書日本語訳文を長崎奉行所立山役所の庫中で直接検分し、「伊祇利須呈書」としてその詳細を記録にとどめている。(図3) また、割注「^{載下二}」とはこの「伊祇利須呈書」を記載するはずだった。

↓『長崎旧記』(3)、『外蕃通書』(4)

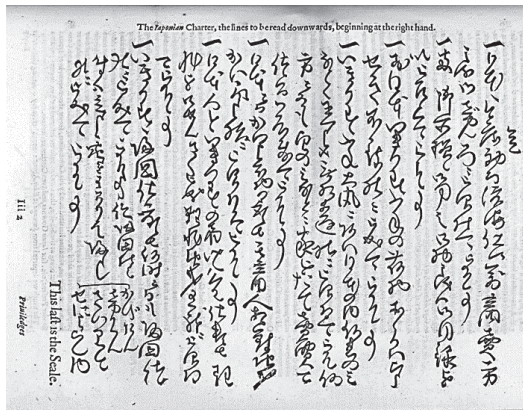


図1 デルボーが提出した「平ラ仮名書付」で「日本語許可証。各行は右からはじまり、下に向かって読む」というキャプション (Purchas [1625], Lib. III Ch. 1 § 7, p. 375)。なお、原本はMS xxvi, 28, British Library.

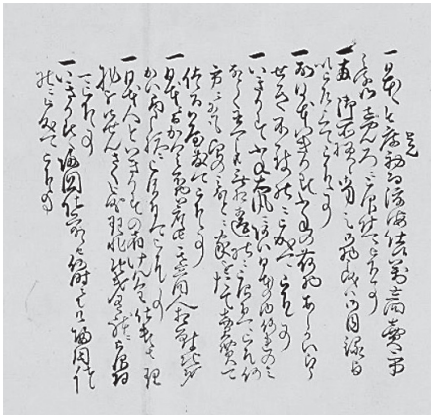


図3 長崎奉行所立山庫中で守重が写したデルボー提出の「平ら仮名」書付（文政元年、「外蕃通輸」より）。後に、『外蕃通書』で「伊祇利須呈書」として調査結果を詳述。）

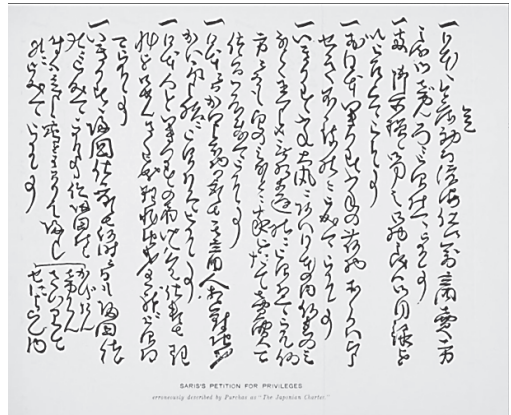


図2 「特権を要求するセーリスの請願書、バーチャスによって誤って『日本語許可証』と記載された」というキャプション付き（Satow [1900], p. lxxx）。

十「エケレス天川イスハニヤ品来ノ四ヶ国ハ停止ノ由シ（中略）此ヨリノ命令アル」のうち、「四ヶ国ハ停止ノ由

について、『増補華夷通商考』巻之四が参考になったと思われる。ただ、「渡海赦免」の囲い字は「長崎旧記」の「日本渡海御赦免」という文言から補った。

↓『増補華夷通商考』、『長崎旧記』（3）

「註54」典拠「荷蘭語リキ」とは、延宝二年のオランダ商館長マルティヌス・セイザル（Martinus Caezar）による情報。

↓『阿蘭陀風説書』（2）

「註55」「其後十六年ヲ経テ元禄元年（以下略）」の典拠は、寛文十三（延宝元）年から十六年後の元禄元年にオランダ商館長に着任したコルネリス・ハン・アウトホウルン（Cornelis van Outhoorn）による情報。

↓『和蘭風説書集成』（1）

「註56」「是ヨリ八十九年ヲ経テ寛政八年丙辰四月松前へ来津セリ」とは、元禄元年から八十九年後の寛政八年にプロートン船長の「プロヴィデンス」号が蝦夷に出没したことを指す。なお、囲い字四は、寛政八年十二月に人見璣邑から「八月頃にアフタヘアンケリヤ舟停泊」の一報が守重に届いていることを根拠に補った。（海老久人「はじめて書かれたイギリス論―その一 近藤守重『伊祇利須紀著』翻刻」『神戸女子大学文学部紀要』第五十三巻（令和二年）、一〇（133）頁註26参照）

「註57」「此開港年リコト開サレド宝永五年（中略）寛政四年（以下略）」について、宝永五年の記事と寛政四年の記事とは、本来関連のない別事件を扱ったものであるにもかかわらず、同じ割注に書加えられている。これが守重の自筆稿の段階で起こっ

ていたのか、あるいは、京大本『伊祇利須紀畧』へ転写されていく過程で発生したのかは不明である。

享宝五年の記事について、その典拠「荷蘭ノ語ニ」とは同年八月二十七日にイタリア人宣教師ヨワン・バッテスタ・シロウテ (Giovanni Battista Sidotti) が屋久島に上陸した事実について、オランダ商館長ヤスフル・ハン・マンタアル (Jasper van Mansdale) による情報を指す。「シロウテ」、つまり、シドッチが屋久島で捕えられ、後に新井白石と面会する。守重はシドッチ上陸地を「多杵嶋」としているのは「屋久嶋」の誤り。

↓『和蘭風説書集成』(2)

享寛政四年の記事について、守重の典拠を確定できないが、同じ文言は大槻玄沢の『嘆詠餘話』、『伊祇利須疑問』、『捕影問答』にも見られる。

なお、この寛政四年とされる事件は、正確には、寛政三年三月二十六日夕方にアメリカ船「レディ・ワシントン (the Lady Washington)」号と「グレイス (the Grace)」号が紀州灘に來航したことである。「堅徳力」とは「レディ・ワシントン」号船長ジョン・ヘンドリック (John Hendrick) の漢名表記である。寛政三年の事件について、大槻玄沢は『捕影問答』で木村兼葭堂から得た情報を元に詳細を記載している。また、『伊祇利須情迹叙略』も「○第三寛政三年亥年三月廿六日異船漂着之事ニ付」という頭書で事件を詳述し、地図と船図を添えている。

〔註58〕「国号」の項のうち、『采覧異言』については上記〔註4〕参照。

〔註59〕「国号」の項のうち、『外国通信事畧』については上記〔註6〕参照。
〔註60〕「国号」の項のうち、『駿府政事録』については上記〔註2〕参照。
〔註61〕「采覧異言歐羅巴云」以下は『采覧異言』を典拠としている。

↓『采覧異言』

〔註62〕「スコツテヤ以下略」は『采覧異言』を典拠とする。

↓『采覧異言』

〔註63〕「オイヘリニヤ以下略」は『采覧異言』を典拠とする。

↓『采覧異言』

〔註64〕本文中「○夏夷通商考云以下略」は『増補華夷通商考』のこと。

↓『増補華夷通商考』

〔註65〕「世界萬国記云以下略」の典拠「世界萬国記」について特定できなかった。ただ、同じ内容の記事は西川如見『長崎夜話草』に見える。

↓『長崎夜話草』

〔註66〕「○和蘭航海畧記」は『和蘭航海畧記』のこと。なお、守重の本文には欠字、誤写が多くみられる。本文中「國ノ技藝」の困い字は当該書から補った。他にも、「ノ初レル所西テ」は意味が不明だし、「郎察」は「拂郎察」の、「日鳴鐘」は「自鳴鐘」の誤写と思われる。また、割注「同前ノ都城ノ地ナリ北極出地五十一度廿三分」は、当該書では地の文になっている。

↓『和蘭航海畧記』

〔註67〕「地毯國名果ニ以下略」の典拠「地毯國名果」について特定できず、類書も見いだせなかった。「亜細亜ノ内新思可齊亜新歩力躡

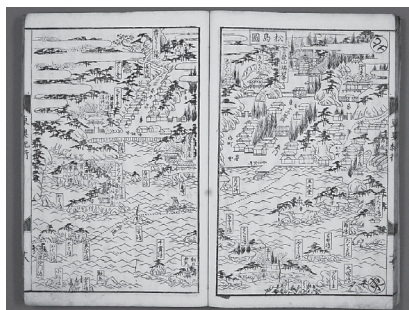
尼曷新喜百利泥亜アリ」は、内容、表記法ともに特異な記述。

〔註68〕「○職方外紀（以下略）」は『職方外紀』から引用。なお、「其近国」は守重の挿入。

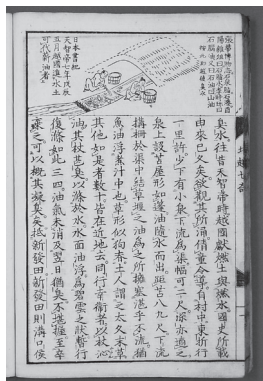
↓『職方外紀』

中割注「守重曰南中小島似我東奥
松島溝火似我北越」を施し、イギリスの湖に浮かぶ島影を我「松島」に見立て、「格落蘭得（グリーンランド）」の民家で絶えて消えることのない「溝火」を我「北越」の「石腦油（石油）」による竈の火に見立てている。守重は長久保赤水（寛政四年）を参考にし、「我東奥松島」については『標注東奥紀行』（十七ウ／十八オ中「松島圖」（左図上）、「我北越」については『探北越七奇記』（二ウ）の挿絵（左図下）などを参考にしたのかもしれない。

〔註69〕「○職方外紀亦説ニ（以下略）」は『職方外紀』ではなく、守重の誤認である。この一文は、マテオ・リッチ（Matteo Ricci、利瑪竇）



松島図



天智帝七年戊辰／五月越國進水土／可代薪油者

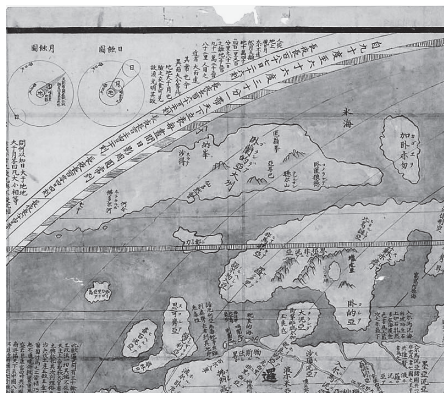
はじめて書かれたイギリス論

が製作し、萬曆三十（慶長七）年に刊行された『坤輿萬國全圖』中、ブリテン島図右側に「諸厄利亜無毒蛇等虫雖／別處携去者到其地即／無毒性」と刻されている。

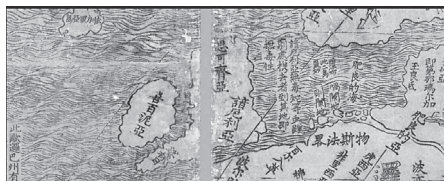
守重の一次資料は東北大学図書館所蔵彩色版に近い。二つ折り写本の左図に現ブリテン島が描かれ、北から「思可齋亜」^{スコシア}、「諸厄利亜」^{イギリス}、「婆林日」の名が刻され、その西のアイランド島には「喜百泥亜」^{ヘルニア}、さらにその西北部に位置する一島（アイスランド）に「依加里亜」^{イガリア}と刻されている。なお、「婆林日」は現在のイングランド南西部「コーンウォール」を指すが、彩色本にも振り仮名はなく、一方、京都大学

〔註70〕「○海國聞見録（以下略）」は『海國聞見録』から引用。

↓『海國聞見録』



東北大学附属図書館狩野文庫（原図彩色）



京都大学附属図書館（原図単色）

〔註71〕「○西洋錢譜云（以下略）」は『西洋錢譜』から引用。なお、本文中の囲い字は『西洋錢譜』から補った。

「カルタゲナ」は現在の南米コロンビア共和国北西部の港市「カルタヘナ」を中心とする地域のこと。また、「テルラヒルマ」は「Tierra Firme」で現在のパナマ共和国南部に相当。また、本文中「フルノン」ト云ヘル人船軍ノ將は当時副提督のエドワード・ヴァーノン(Edward Vernon)を指す。

↓『西洋錢譜』(2)

〔註72〕「○泰西圖説云（以下略）」は『泰西輿地圖説』から引用。ジョン・ウツドの北極海航路開拓について「伊祇利須記畧提要」(二〇)で言及されている。(〔註16〕参照)なお、本文が「船行スルコト」と中断する問題について、木崎弘美『伊祇利須紀略』と近藤重蔵「片桐一男編『日蘭交流史』その人・物・情報」(思文閣出版、二〇〇二)149頁参照。

↓『泰西輿地圖説』(3)

〔註73〕「○御製天地二球用法記ニ云（以下略）」は『新制天地二球用法記』から引用。

↓『新制天地二球用法記』(2)

〔註74〕「○論動ノ地ト屋乱ノ地（以下略）」は同書から引用。

↓『新制天地二球用法記』(3)

〔註75〕「○悦尹掘蘭援国耳耳四時而ノ地ノ内ノ（以下略）」は同書から引用。

↓『新制天地二球用法記』(4)

〔註76〕「○論動ノ地ヲ西ヨリ東ニ旋シテ（以下略）」は同書から引用。

↓『新制天地二球用法記』(5)

〔註77〕「○地平圖ノ上ニ記録アル（以下略）」は同書から引用。

↓『新制天地二球用法記』(6)

〔註78〕「○論動ノ地ノ赤道ノ高度ハ（以下略）」は同書から引用。

↓『新制天地二球用法記』(7)

〔註79〕「○論動ノ地ノ赤道ノ高度ハ（以下略）」は同書から引用。

↓『新制天地二球用法記』(8)

〔註80〕「○南方ノ極輪ハ（以下略）」は同書から引用。なお、本文の図は原本一字空欄を指す。

↓『新制天地二球用法記』(9)

〔註81〕「○別子午輪ニ当ル（以下略）」は同書から引用。

↓『新制天地二球用法記』(10)

〔註82〕「○地毬略記ニ一書二日」の典拠「地毬略記」について特定できなかった。本文中の漢名表記は林子平『輿地國名譯』の呼称と多くが一致し、記事内容は子平が長崎遊学時に訪ねた本木良永の著作と関連があるのではないかと推察される。ちなみに、本文後半「書ニ云漢又利亜人都可友太吸援ト云ル者（以下略）」は、本木良永訳松村元綱校『阿蘭陀地球圖説』三巻のうち「阿蘭陀地球圖説卷之二」に同じ内容が記載されている。

↓『輿地國名譯』、『阿蘭陀地球圖説』(2)

〔註83〕「○國々里数算法」以下の記事について、その典拠は示されていない。

ないが、『阿蘭陀地球圖説』に同じ記事が見える。

↓『阿蘭陀地球圖説』(1)

書誌(守重が直接参考とした文献とそれに関連する資料に限定し、筆者が底本として利用しえた文献の書誌情報である)

『安南紀略藁』 ↓近藤守重

『亜瑪港紀略藁』 ↓近藤守重

『伊祇利須情迹叙略』 尾張藩儒学者秦 世寿が文政年間にイギリス情報をまとめた文書 名古屋市蓬左文庫所蔵。

『異國日記』 以心崇伝著異國日記刊行会編『異國日記 金地院崇伝外交文書集成』 原本(影印)(東京美術、一九八九年)。なお、影印本の虫食い欠損部を京都大学附属図書館所蔵で印記「玉松家文庫」とある『異國日記 完』をもとに(「」中に補った。

『異國幟旗考』 ↓近藤守重

『囑蘭新譯地球全圖』 橋本宗吉作・長久保赤水玄珠閱寛政八年の図帖

国際日本文化研究センター所蔵(デジタルアーカイブ)。

『和蘭航海畧記』 松村元綱『和蘭航海畧記』(安永七年) 国立国会図書館所蔵(デジタルアーカイブ)。

『阿蘭陀地球圖説』 本木良永訳松村元綱校『阿蘭陀地球圖説』(「阿蘭陀地球圖説卷之二」に「安永元年壬辰季冬吉日」の奥書) 長崎市立

はじめて書かれたイギリス論

博物館所蔵。

『阿蘭陀風説書』 板澤武雄著『日本古文化研究所報告第三 阿蘭陀風説書の研究』(東京、日本古文化研究所、昭和十二年)所収。なお、寛文六年の「阿蘭陀風説書」については、『阿蘭陀風説書の研究』所収「第十三號 寛文六年(西紀一六六六年)風説書其一」の「咬啗吧出壹番船之阿蘭陀口書」(三四頁―三五頁)を参照。

『和蘭風説書集成』 日蘭学会法政蘭学研究会編『和蘭風説書集成』(吉川弘文館、一九七七年―一九七九年)上下巻。

『御製天地二球用法記』 ↓『新制天地二球用法記』

『海國聞見録』 陳倫炯撰『海國聞見録』(乾隆九(寛保三)年) 京都大学文学研究科附属図書館所蔵。『職方外紀』とともに舶載されるも、禁書目録に含まれることはなかった。

『華夷通商考』 西川忠英如見子誌『華夷通商考』上下(書林 梅村弥興門 古川三郎兵衛、元禄八年) 京都大学附属図書館室賀文庫所蔵。

『外國通信事畧』 新井白石著竹中邦香校訂『五事畧』上下(白石社、明治十六年)のうち上巻三十六オ―五十二ウ所収。「校訂緒言」の「外國通信事畧と本朝寶貨通用事畧とハ長崎互市の舊弊を矯正せられん

の爲に(中略)經世必用の書」という解説から、成立年は正徳五年発布の「海舶互市新例」の頃と推定される。

『外国船路積』 ↓『洋記』異國渡海船路積

『外蕃通書』 ↓近藤守重

『外蕃通翰』 ↓近藤守重

『憲教類典』→近藤守重

『好書故事』→近藤守重

『御當家令條』『慶祿記』全三十七 国立公文書館所蔵（デジタルアーカイブ）。

近藤守重

『安南紀略藁』（寛政八年）卷一、二 國書刊行會編『近藤正齋全集』第一、第二、第三（國書刊行會、明治三十八年、明治三十九年）（以下、『全集』）のうち第一 一―百四十六頁所収。

『亜瑪港紀略藁』（寛政七年）上下 『全集』のうち第一 一―四十二頁所収。

『異国幟旗考』（寛政八年）国立公文書館所蔵（デジタルアーカイブ）。目録頭書に「諸水国之幟旗未タ當世ニ昭明／ナラサル所ノ者ヲ新增シ且舊図／ノ誤ヲ考正凡五十餘図／ヲイレキト後街コル子ーリスケレヘル著」と記され、奥書に「崎陽 檜林恭助補正／右者予崎陽鎮府ニアリテ故ノ訳士／檜林ヲ使テ考正補増セシムル所也庶／幾ハ他日浜海ノ国能ク此図ヲ写シ／テ其遠見番所ニ置防御ノ一助ト／モ可成哉／寛政八丙辰年十二月日 近藤守重」とある。「ヲイレキト後街コル子ーリスケレヘル」はオランダ、ユトレヒトの出版人 Cornelis Kribber のこと。これに先立つ三ヶ月前「寛政丙辰秋九月」に『萬國標旗圖』一卷をまとめている。『異国幟旗考』はその改訂版である。

なお、『異国幟旗考』について、原本表題「SCHOUT-PARK sller」^[17]

SCHEEPS VLAGGEN des geheelen WATER-WAERELDS; CORNELIS KRIEBER」を示す論もあるが、筆者は特定できなかった。（岡宏三「長崎出役前後における近藤重蔵 人的関係を中心に」『青山大学文学部紀要』34号（一九九二年）、86頁）ただ、コル子ーリスケレヘルのなかに元となつたと思われる一七一一年に蘭仏二カ国語で出版された Pieter Schenck 版を参照した。

Schenck [1711] SCHOUW-PARK aller SCHEEPS-VLAGGEN des geheelen WATER-WAERELDS; vermeerderd Metruim 50niewe, nooit voor dezen int' Licht gebrachte; en Verbeterd van veele grove souten byde anderen begaan. Te samen gesteld en yutgegeven door Pieter Schenck, te Amsterdam, op den Vygendam: met Privilegie. 1711.//TABLEAU des PAVILLONS de MER, qui se trouvent dans tous les lieux du MONDE AQUATIQUE Augmenté de 50, qui n'ont jâmais été mis en lumiere; et Corrigé de plusieurs fautes essentielles, qu'on trouve dans Les autres editions. Recueilly et donne an publie par P. SCHENCK: à Amst. sur le Vygendam: Avec Privil. 1711. (Rijksmuseum, Amsterdam)

『外蕃通書』（文政二年）全二十七冊 『全集』のうち第一 一―百九十二頁所収。

『外蕃通翰』（文化元年）国立公文書館所蔵（デジタルアーカイブ）。

『憲教類典』のうち外題「憲教類典 三四」、内題「憲教類典 二一ノ

廿二 長崎^{異國} 国立公文書館所蔵（デジタルアーカイブ）。また、同書外題『憲教類典 二ノ廿二 長崎^並異國』、内題「憲教類典 二ノ廿二 長崎」早稲田大学附属図書館所蔵（古典籍総合データベース）。

守重自身は寛政元年に「御條目壁書並御觸書等之類」、つまり、幕府法令集を「私ニ編集仕」、「憲教類典」としてまとめ寛政十年に幕府に献上している。

『好書故事』（文政九年）全八十五卷 『全集』のうち第三 一二二七十八頁所収。

「水哉叢書 近藤守重事蹟考」 水哉 村尾元長編『水哉叢書 近藤守重事蹟考』『全集』のうち第一 一五十二頁所収。

『坤輿萬國全圖』 東北大学附属図書館鹿野文庫所蔵（画像データベース）及び京都大学附属図書館所蔵（貴重資料デジタルアーカイブ）。マテオ・リッチ（Matteo Ricci、利瑪竇）が萬曆三十年（慶長七年）に監修、制作。本図は慶長十年に日本へもたらされた。

『采覧異言』 新井白石『采覧異言』（延享五年）五卷 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵。

『職方外紀』 ジュリオ・アレリ（Giulio Aleni、艾儒略）が天啓二（元和九）年に著した世界地理書『職方外紀』五卷 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵で寛政八年の写本。享保十六年に舶載。寛永七年に禁書指定。寛政五年から同七年にかけて一時的に禁書指定が解かれる。興味深いのは守重自身の禁書へ向き合う心構えで、彼は「耶

はじめて書かれたイギリス論

蘇ノ書モト嚴禁ニ係ト雖モ其書ノ解題ヲ知ラズンバ其狡黠ヲ指摘シテ其詭譎ヲ検討スルニ由ナシ」とし、御製禁を鵜呑みにせず、みずからの解釈によって是非を判断すると明言している。（『好書故事』、二百十九頁）

『新制天地二球用法記』 本木仁太夫（良永）が「寛政四年壬子三月朔日」（本木自筆本奥書）に記し、「寛政五年癸巳九月」に「右之通和解仕奉差上候以上」（早稲田本「新制天地球用法記六七」の奥書）として幕府に献上された。表題表記について、別に、蕃所調所には「天地二球用法書」と「天地二球用法 全」という書名が登録され、『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記評説』や内題「星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記」を正式の表題とする場合もあるが、本稿では『新制天地二球用法記』を統一表記とする。

なお、守重の出典表記「天地毬用法」（二〇、二一）は、おなじ本木による安永三年成立の『天地二球用法』（国立国会図書館所蔵）の表題と紛らわしいが、守重の当該箇所を検証すれば、『新制天地二球用法記』を指す。また、「御製天地二球用法記」（上六〇）の「御製」は『新制天地二球用法記』が献上本であることから書き添えられたと思われる。

『新制天地二球用法記』翻譯に際して用いられた原本は、オランダ人J・プロース（Jacob Ploos）のオランダ語重訳本 *GRONDEN der STARENKUNDE, gelegd in het ZONNESTELZEL bevattijl gemaakt, in eene Beschrijving van't Maaksel en Gebruik*

der nieuwe HEMEL- en AARD-GROEBEN: en in't Gebruik deezer Globen ter oplossing der Klootsche Driehoeken en Klootsche Werkstukken der Starrenkunde. In't Engelsch beschreeven door GOORE ADAMS, Koninklijke Mathematische Instrument- maker. In't Nederduits vertaald en met Aanmerkingen verrijkt door JACOB PLOOS van AMSTEL. Te Amsterdam, bij Kornelis van Tongerlo, 1770 ㇏㇏㇏. (ETH Library, Zürich) のオランダ語訳の原著は、イギリス人 G・アダムズ (George Adams) の *A Treatise Describing and Explaining the Construction and Use of New Celestial and Terrestrial Globes. Designed to illustrate, In the most Easy and Natural Manner, The Phenomena of the Earth and Heavens, And to shew the Correspondence of the Two Spheres. With a great Variety of Astronomical and Geographical PROBLEMS occasionally interspersed.* London: Tycho Brahe's Head, 1766 ㇏㇏㇏. (Bodleian Libraries, University of Oxford)

筆者の調査によれば、『天地二球用法記』には三種の写本が残されている。

一 早稲田大学図書館所蔵『新制天地二球用法記』全八冊(古典籍総合データベース)のうち、第六冊「新制天地二球用法記七」の奥書に「右之通和解仕奉差上候以上 本木仁太夫判 寛政五年癸巳九月」と墨書。また、第二冊「新制天地二球用法記二」巻末に「第九之板」(Pl. IX)から「第十一ノ板」(Pl. XI)までの五図(figs.)、

第七冊目巻末に「第一ノ板」(Pl. I)から「第八ノ板」(Pl. VIII)までの二十五図(figs.)が料紙に墨で描かれている。ただし、英語原本およびオランダ語訳の「第十二ノ板」(Pl. XII)から「第十四ノ板」(Pl. XIV)が欠けている。

二 国立公文書館所蔵本で写本外題に『天地二球用法記 全』(デジタルアーカイブ)とある写本は、内容から『新制天地二球用法記』におなじ。奥書に「右之通和解仕奉差上候以上 阿蘭陀大通詞 本木仁太夫良永謹譯 寛政四年壬子三月朔日」と墨書。おそらく、本木自筆本からの派生本と思われる。ただし、当該写本は『新制天地二球用法記』全体の一部のみ第一章から第八十章までの要約部「太陽窮理了解説」のみで、さらに、図版については、後から所定個所に描き込む予定だったのか、空白のままになっている。イギリスの国号漢字表記についても、「塩掘蘭援國」のみで「悦尹掘蘭援國」は見えない。

三 もともと本木家に秘蔵され、長崎県立図書館(現長崎歴史文化博物館)へ移管された本木良永自筆本『新制天地二球用法記』全七冊(寛政四年壬子三月朔日成立)では、アダムズの英語原本を踏襲したブロースのオランダ語訳の全十四図版(Pls.)三十六図(figs.)が別紙に作図して挿入貼付されている。

なお、守重の「蛮書」(ニオ)はオランダ語訳を指し、二本が舶載されていたことは、以下の所蔵票で確認できる。(1) 蕃書調所…七番甲 天 アーダムズ著述 星学原始之書 コロンデル デルス

タルレキュンデ 千七百七十一年 天 全一冊。(2)七番甲 天
ゲラルゲ アーダムズ ゴロンデル デル スタルレキュンデ 天
地二球用法書 千七百七十年 楓山 全 一冊「天地二球用法
全」。現在の国立国会図書館所蔵本の⁽¹⁾Gronden der starrenkunde
gelegd in het zonnestelzel bevatlijk gemaakt (Amsterdam, David
Klippien en Hendrik Gartman, 1771) (請求記号：蘭・202) と⁽²⁾
Gronden der starrenkunde gelegd in het zonnestelzel bevatlijk
gemaakt... (Amsterdam, David Klippien en Hendrik Gartman, 1770)
(請求記号：蘭・203) に該当する。

「水哉叢書 近藤守重事蹟考」↓近藤守重

『駿府記』 国立公文書館所蔵(デジタルアーカイブ)。

『駿府政事録』 国立公文書館所蔵(デジタルアーカイブ)。

『西洋錢譜』 源龍橋(朽木昌綱)『西洋錢譜』(天明七丁未歲仲秋 彫刻

和田文七善就、書林 出雲寺文治郎) 京都大学附属図書館所蔵。

『世界萬国記』(特定できず)

『増補華夷通商考』 西川求林齋輯『増補華夷通商考』五卷(洛陽書林

甘節堂學梁軒全刻、宝永五年) 京都大学附属図書館室賀文庫所蔵。

『其国書通商考』↓『華夷通商考』

『泰西輿地圖説』 朽木昌綱(彩雲堂主人)『泰西輿地圖説』天地日月星

辰(寛政元己酉年初夏 江府書林 日本橋通二丁目 松本善兵衛)

京都大学文学研究科所蔵。

『地毯國名果』(特定できず)

『地毯略記』(特定できず)

『通航一覽』 林復斎(燧)輯國書刊行會編『通航一覽』全八卷(國書刊
行會、一九二二年ー一九一三年)。

『訂正増譯采覽異言』 山村才助(昌永)『訂正増譯采覽異言』(全十五冊、
享和三年) 京都大学附属図書館所蔵。

『天地毬用法』↓『新制天地二球用法記』

『長崎旧記』 太田勝也編『近世長崎・対外関係史料』(思文閣出版、二

〇〇七年)、515-615頁所収。なお、『長崎旧記』は享保十四年以降

に長崎奉行所で書きとられた文書。ちなみに、守重自身、この『長

崎旧記』について、「長崎舊記ニ^{守重筆ヲ板地ニ於テ抄録スルモノナリ}」として長崎在勤時に写

していた。『好書故事』二百十六頁)

『長崎古今集覧』 松浦東溪著森永種夫校訂『長崎古今集覧』上下「長崎

文献叢書第二集第二、三卷」(長崎文献社、昭和五十一年)。

『長崎雜記』『長崎雜記』について、『長崎旧記』を見よ。筆者は京都府

立京都学・歴史館(旧京都府立総合資料館)と長崎県立長崎図書館

所蔵の『長崎雜記』を調査したが、該当記事を見つけることはでき

なかった。守重は『伊祇利須紀畧』以外に、『外蕃通書』でも『長

崎雜記』を典拠として利用しているが、守重の当該箇所全七件を『長

崎旧記』と校合した結果、すべてが『長崎旧記』に見ることができる。

『長崎雜話』 成立年、筆記者ともに不明 京都大学附属図書館所蔵。

『長崎實録大成』田邊八右衛門茂啓編著古賀十二郎校訂『長崎志正編』(長

崎文庫刊行會、昭和三年) 所収。

なお、「長崎實録大成」は、長崎聖堂書記田邊八右衛門茂啓が編纂し、宝暦十四年九月に長崎奉行所に提出した原本を指し、その後も書き継がれ、明和四年に『長崎志正編』と改題された。守重が『安南紀略藁』巻之一や『亜媽港紀略藁』上で『長崎志』と記している表題と同一書である。

『長崎夜話草』 西川如見『長崎夜話草』（京六角通御幸町西入町茨城多左衛門繡梓、享保五年） 京都大学附属図書館所蔵。

『萬國記』 作者、成立年不詳 京都大学文学研究科図書館内田文庫所蔵。本書は、当時の一大百科全書とも言うべき『珍珠囊』と題する叢書のうち「第一」を成すものである。奥書に「明和三年丙戌夏四月上澣膳寫 竹菴主人」とある。

『標注圖画東奥紀行 附探北越七奇記』 長久保赤水『標注圖画東奥紀行 附探北越七奇記』（水戸長久保藏板 寛政四年壬子冬十二月） 早稲田大学図書館所蔵（古典籍総合データベース）。

『捕影問答』 大槻玄沢『捕影問答』前・後篇（文化四、五年） 神崎順一「翻刻 大槻玄沢著『捕影問答』」（一）（二）『ブリア』（天理大学）第128号、6990頁、第129号、6681頁。

『洋記異國渡海船路積』 作者不詳で寛永十四年成立 京都大学文学研究科図書館内田文庫所蔵。表紙：縦240ミリ×横167ミリ。装丁：袋綴・四針眼、一冊。書名：題簽左肩（墨書）「洋記」（大文字）その下に「異國渡海船路積」（小文字）と墨書。構成：中扉オに「異國渡海船路積」と墨書され、中扉ウは白紙。本文は八丁で、ハオには奥書として「寛

永拾四年／八月朔日」と二行わたり墨書。この写本には「伊澤氏／酌源堂／圖書記」の印記があり、巻末ハウには伊澤蘭軒が文化三年に長崎で読了したことを示す朱書が見える。また、『洋記異國渡海船路積』は独立した一本の形をとっているが、記載内容は、図帖「1」「寛永」奥地圖「江戸写」（横浜市立大学鮎澤信太郎文庫所蔵）と一致する。図帖には日本を含むユーラシア大陸全図の下に「奥地圖」と題し、「日本長崎ヨリ異國江渡海之湊口マテ船路積但三拾六町一里」ではじまる各異國と長崎との距離などを記し、奥書に「此繪圖寛永十四年丁丑八月於長崎書之」とある。『洋記異國渡海船路積』はこの「奥地圖」を写したと思われる。なお、『國書總目録』とその補訂版では『洋記異國渡海船路積』に関する書誌情報は未掲載。

『奥地各國積解』 平野昌博撰『奥地各國積解』国立国会図書館所蔵太田南畝編『三十幅』『廣三十幅之卷一』所収（デジタルアーカイブ）。なお、南畝子輯「廣三十幅之卷之一目録」には「奥地各國積解 平野昌傳」と写されている。また、内題には「奥地各國積解 全」、本文冒頭に「奥地各國積解 平野昌傳撰」と写されている。奥書に「奥地各國積解使源綱達膳寫／享和癸亥仲冬 杏花園／文化元年甲子三月之吉装釘 杏花園」が見える。

『奥地國名譯』 林子平『奥地國名譯』（安永六年） 山岸徳平、佐野正巳共編『新編林子平全集』全五（第一書房、一九七八―一九八〇年）のうち2、133-139頁所収。

- Broughton [1804] Broughton, William Robert. *A Voyage of Discovery To The North Pacific Ocean: In Which The Coast of Asia, From The Lat. Of 35o North To The Lat. Of 52o North, The Island Of Insu (Commonly Known Under The Name Of The Land Of Jesso,) The North, South, And East Coasts Of Japan, The Lieuchieux And The Adjacent Isles, As Well As The Coast Of Corea, Have Been Examined And Surveyed*. London, 1804. (British Library)
- Delboe [1673] Kaempler, Engelbert. *The History of Japan: Together with a Description of the Kingdom of Siam* 1690-92. 3 vols. Glasgow, James Maclehose and Sons, MCMVI. Volume III, pp. 341-360. (British Library)
- Purchas [1625] Purchas, Samuel. *Purchas His Pilgrimes*. In Five Bookes. London Printed by William Stansby for Henrie Fetherstone, and are to be sold at his shop in Pauls Church-yard at the signe of the Rose. 1625. (British Library)
- Satow [1900] Satow, Ernest ed. *The Voyage of Captain John Saris to Japan, 1613*. London, printed for Hakuyt Society, 1900. (British Library)
- Thompson [1833] Thompson, Edward Maunde. Ed. *Diary of Richard Cocks Cape-Merchant in the English Factory in Japan 1615-1622 with Correspondence*. 2 vols. The Hakuyt Society, MDCCCLXXXIII. Volume I. (British Library)

【追記】本紀要第五十三卷所収拙稿のうち「第一節『伊祇利須紀署』の書誌情報」三(140)頁⁽¹⁸⁾と⁽¹⁹⁾の間に次の事項を追加する。

昭和四十(一九六五)年、浅井清「明治維新前後におけるイギリス国会制度の移入」『社会科学ジャーナル』6号(国際基督教大学社会科学研究所、1965) pp. 11-50のうち pp. 18, 27『伊祇利須紀署』成立年を寛政八、九年から享和三年としている。同氏は京大本から派生した謄写本を昭和九年に慶応大学附属図書館へ寄贈し、当該論文(p. 18)でも謄写本奥書でも「わが国における最初のイギリスに関する単行著作」と記している。

キーワード：近藤守重、伊祇利須署、日英交渉史、近世日本、Kondo Morishige、British Studies、Anglo-Japanese Relationship, Edo Period